真宗を学ぶ

平野修

同朋選書 26

目次●真宗を学ぶ

講義一　真宗を学ぶ――1
はじめに／念仏に自信が持てない／『選択集』の背景／『愚禿鈔』という書物／念仏の仏教／念仏についての疑問と心得

講義二　真宗の行・証――39
竪と横・超と出／仏教は行・証／南無阿弥陀仏と浄土三部経／善導の六字釈／南無阿弥陀仏に行証あり／彼岸と浄土／功徳荘厳ということ／真実功徳／竪超・竪出と横超・横出

講義三　念仏が行 —— 87
言葉を確かめる／「助かる」ということ／行・証の問題点／至誠心・深心・回向発願心／『観経』の三心・『大経』の三心／善導が明らかにした問題／常・楽・我・浄のつもり／念仏が行という意味／変わらないまま超える

講義四　他力の念仏 —— 121
プラス・マイナスの人生観を問う／法然・親鸞・蓮如の勧めた念仏／元気あふれる念仏者たち／はからずも他力／自力の正体／自力の念仏／回心ということ／本願他力の意趣

講義五　自力の心をひるがえす —— 153
自力の反対が他力か／弥陀の本願／自力の心をひるがえす／生死の苦／煩悩具足のわれら／いずれの行もおよびがたき身／真実報土の往生

講義六　他力の中の自力 —— 181
他力とは何か／自力の立場での他力／なぜ念仏なのか／自力は流転やむことなし／「私」と言いはじめて／「罪福信」という問題

講義七　真宗の信心 —— 211
真宗の要は信心／同朋会運動の中で／信心同一ということ／如来よりたまわる信心／「私」を成り立たせているもの／真宗が教えたこと

講義八　念仏の信 —— 241
仏を念ずるということ／観仏と念仏の問題／問いただされる自分自身／念仏の信で成り立つ自分／何のために生きているのか／信心からの自己実現

溝にかかる橋（自筆原稿） —— 267

あとがき —— 276

「勢至章」に云わく、「十方の如来、衆生を憐念したまうこと、母の子を憶うがごとし」と。

『大論』に云わく、「たとえば魚母のもし子を念わざれば、子すなわち壊爛する等のごとし」と。

『愚禿鈔』（真宗聖典四三四頁）

講義一

真宗を学ぶ

一九九二年十月二十日講義

はじめに

三人の方々が学校の方までおいでになられまして、いろいろな問題がありながら、なかなかまとまって勉強するということも難しいし、そして、自分たちの年代からすれば、ちょうど、教育年齢からもう少し下の子どもから、教育年齢に達する子どもたちもあって、容易に法を聞くということが難しい。しかし、お寺にいる以上いろんな問題で、法ということが問題になる、そんな中で自分たちで少しずつでもいいから勉強していけるような集まりを持ちたいということで、学校の方へ来ている時でもよろしいから顔を出していただけませんか、というお言葉がございました。

それで「分かりました、じゃあ、機会があったら参りたいと思います」ということで終わりまして、その後、「是非とも」ということで、今日になったわけでございます。

坊守さんたちが、なかなか聞法しにくい中で、自分たちがいろいろと思っている問題などを考えていく会として発足していったようですけれども、ご住職さんたちもそういう機会なら聞かせてもらえばいい、ということで、今日の運びとなったようでございます。まあ、坊守さん方が、やはり主体となってお考えになられればいいと思います。

実際、小さなお子さんがありながら何かを考えていく、何かを尋ねていく必要を感じていても、なかなかできないこともありますから、そういう坊守さんたちの現実に即して、そして、少しでも願っていたことが実現していくということを基において、これからもお続けいただければというふうに思っております。

それで、じゃあどういうふうに運んでいこうかということもあったものですから、その折に申し上げていましたけれども、『愚禿鈔』というお書物がございます。親鸞聖人［一一七三～一二六二］が晩年にお作りになられた書物でございまして、長らくこれは何のために著されたお書物であるかということが、よく分からないままに残ってきたわけですね。

そして、この『愚禿鈔』は、二、三の他の書物と同じように親鸞聖人の直筆が残っていないものなのですね。いわゆる「真筆本」と申しますけれども、それが残っていないわけです。そして真筆本が残っていない場合は、書き写したものですね、「書写本」と言われるものが残っておりまして、一番古いもので、今では高田派の専修寺という、三重県の津市にありますけれども、真宗十派の中で高田派という派がありますね。作家でいうと、丹羽文雄さんが所属している派ですけれども、その高田派は、宗祖はやはり親鸞聖人でございまして、二代目が真仏［一二〇九～一二五八］という方、三代目に顕智［一二二六～一三

一〇」という方がいらっしゃいますけれども、その顕智という方、この方は直接親鸞聖人とお会いなさった方です。書簡集（『末燈鈔』）にも顕智という人の名が出てまいります。この顕智という方の書き写したものが一番古いものとして、残っているわけですね。で、その後には、本願寺の礎になった覚如［一二七〇～一三五一］という方の書写、あるいはその覚如の子どもさんの存覚［一二九〇～一三七三］という人、この方の書写されたものが残っていまして、親鸞聖人八十四歳の時の著作ということでずっと伝えられてきたのですけれども、何のために著されたのかということが分からなかったのですね。

それで、その『愚禿鈔』という書物がございますから、何かそういうものを一つ手がかりになさって、皆さんの学習をお進めになっていかれてはどうですか、というふうに申し上げておりました。

念仏に自信が持てない

どうしてそういうことを申し上げたのかと言いますと、我々の宗旨は、念仏ということが基になっている宗旨ですね。浄土真宗、その宗旨においては念仏ということが基である。で、念仏は、誰が言いましても南無阿弥陀仏ですし、誰が聞きましても南無阿弥陀仏

です。

ところがその南無阿弥陀仏ということについて、はっきりとした心得というものがあるのであろうか、という問題がいつも我々に問題になってきます。簡単に言えば、「南無阿弥陀仏というのは何のことですか」という疑問も当然ありますし、また、「南無阿弥陀仏と言えばどうなるんですか」ということもありますし、「南無阿弥陀仏というのは、我々の生活の中でどれほどの意味を持つんですか」という疑問もあります。

真宗の寺院にいる限り、南無阿弥陀仏ということを抜きにすることはできないわけですね。我々の行儀として言うなら、朝、お勤めをする、あるいは、お参りをするその時に、手を合わせて「南無阿弥陀仏」とこう言います。言えないまでも我々が手を合わせて頭を下げる本尊と言われるものは阿弥陀如来を表す。こうなりますから、その阿弥陀如来の方に向かって手を合わせ、頭を下げるのですから、その姿はやはり南無阿弥陀仏という姿になっています。

で、ご門徒さんと関わりを持つにしましても、そこで「正信偈」があげられたとしても『阿弥陀経』［浄土三部経の一つ。浄土三部経とは『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経］があげられたとしても、そのお勤めが終わりますと必ずといっていいほど、ご門徒

さんも南無阿弥陀仏と言われます。それは、葬儀という儀式であれ、法事という儀式であれ、やはり、そこで語られることは南無阿弥陀仏ということですね。

ですから大谷派の寺院に身を置く限り、南無阿弥陀仏ということを抜きにしては、その生活は成り立たないということになっています。そういう、南無阿弥陀仏抜きでは成り立たない生活であるはずなのに、南無阿弥陀仏ということについてはぼんやりとしている、という点が一番大きな問題ですね。

で、そのぼんやりとしているということも、いろんな言い方が可能でありまして、念仏ということについてよく分からないというふうに考える場合、その場合はですね、「念仏というものはよく分からないものだ」というふうに了解してしまっているわけですね。ともかく南無阿弥陀仏というものがあるのですから、そのあるということについての受けとめが、またいろいろとあるわけですね。

そういうことを手短に言いますというと、南無阿弥陀仏ということについては、それぞれすでに心得があるわけです。「よく分からない」というふうに心得ているわけです。で、少し勉強しますと、「南無阿弥陀仏というのは、あれは呪文ではない」という心得もあります。その点は、真宗大谷派の方はずいぶん聞法ということに力を入れていますから、南

無阿弥陀仏と言って病気が治るとか、商売がうまくいくというようには、どなたも受け取られないかと思うんですね。そういう点では、「呪文とか、お札とか、お守りのようなものとは考えない」。こういう心得があります。それで、「じゃあ何ですか」となると、これがはっきりと言えないわけですね。我々の言い方は、否定的な言い方になるわけですね。「念仏はそうじゃないと思います」だとか、「念仏ではそんなことは言わないと思います」というように、何々でない、何々でないという言い方ができますけれども、じゃあ「念仏はこういうものである」というふうに言い切れないという面があります。ここが何ともはがゆいところなんですね。そういうことから言いますと、念仏について漠然とした心得はあるけれども、その心得が自信にならないという問題ですね。もっと言えば、念仏について自信が持てないわけです。

これはご門徒の方々も同じです。念仏に自信が持てませんから、いろいろ言われると、「それもいいですね」「あっちの話もいいじゃないでしょうか」というふうに揺らいできます。そういう点からいきますと、新興宗教ということで、いろんな宗教がありますけれども、大抵食い破られていくのは真宗門徒ではないでしょうか。真宗門徒が大抵新興宗教の中に入れられていきます。それは、どうしてそういうことになるのかと言えば、いろんな

言い方があるでしょうけれども、一つには、念仏ということについて自信がないわけです。自信が持てない。

こういう点は、今もそうですし、蓮如上人［一四一五～一四九九］の時代もそうですし、親鸞聖人の時代もそうですし、また、法然上人［一一三三～一二一二］の時代でも同じようなことがあるわけですね。念仏について自信が持てないのです。

『選択集』の背景

そういう点で、お名前は聞いたことがあると思いますけれども、九条兼実［一一四九～一二〇七］という方がいらっしゃいます。九条兼実という人は、法然上人、親鸞聖人が流罪［一二〇七、「承元の法難」、法然七十五歳、親鸞三十五歳］になる時の当時の大臣ですね。まあ、今流で言いますと、文部大臣なんかに当たる役職なのですね。

それで、この九条兼実という人は、法然上人という人に傾倒しておりまして、その法然上人の手で出家なさるということまでなされた人です。この九条兼実の名前が残ってきたのは、もちろん政治的な意味でも残るんですけれども、もう一つ我々にとって大事な意味を持っているのは、この九条兼実が法然上人に、念仏の手引きになるようなものを著して

ほしいとお願いなさって、その九条兼実のお願いに応えて法然上人が著されたものが『選択集』という書物だということですね。

正式名は『選択本願念仏集』という言い方です。その「本願念仏」という字が省かれまして『選択集』という言い方をします。この法然上人の『選択集』ですね、この書物はどうしてできあがってきたのかと申しますと、今言いました九条兼実が、かねがね法然上人にお願いしていたわけです。九条兼実という人は、法然上人のもとで出家された方ですけれども、時の文部大臣のような役目もしていますから、比叡山の仏教者たちとも付き合っていますし、奈良の仏教者たちとも付き合っているわけです。で、比叡山に伝わっている仏教、奈良に伝わっている仏教ですね、これも大きく分けて、奈良の方に伝わるのは文字通り奈良時代に中国・韓国経由で日本にやってきます。その時に日本の方の受け入れ方というのは、仏教というものを学問として受け入れたわけです。その仏教も、学問と言いましても、ただ広まったわけではなくて、中国経由で来ますから、華厳宗とか、法相宗とか、律宗とかですね、中国でできあがったものが、そのまま輸入されてきます。

例えば、東大寺に大仏があります。あれは『華厳経』に「盧遮那仏」［ヴァイローチャナ Vairocana］という名前の仏様が出てくるわけです。盧遮那仏は、正式には「毘盧遮那仏」

という言い方なのですけれども、別の言い方ですと、「大日如来」という言い方になるのです。それを『華厳経』では盧遮那仏と言います。その『華厳経』という経典が専門的に勉強された場所が東大寺でありまして、そしてそういう専門的に勉強する人の集まりを日本では「宗」というふうに考えていたわけです。ですから「華厳宗」というのは『華厳経』という経典を専門的に勉強する人たちの集まりで、そういう場所が東大寺であったわけです。ですから東大寺では『華厳経』に毘盧遮那仏という仏様があらわされている、その仏様を造ろうではないかということになって、東大寺に大仏さんができあがったわけですね。

で、聖徳太子［五七四～六二二］ゆかりの場所で法隆寺という寺がありますね。法隆寺は、東大寺と違いまして、法相宗ですね。この「法相」というのはどういう学問であるのかというと、この世にあるあらゆる存在を分類し、そして、総合するという一つの立場でありまして、言ってみれば、あらゆるものは作られるものであり、作られたもの、できあがったものですから諸行無常と、こういうことになりますね。形あるものは滅していく、と。で、この世のものを大きく分ければ、変化して最後は壊れていったり消えたりするものと、まったくそんなことのないものがあります。まったくそんなことがないものとは、どんなものかというと、インド人が考えましたのは、「空」ですね。空は壊れないと考えたわけですね。あとはみんな変わっていくというわけです。ところが大空が壊れたことはありませんから、大空のことを「虚空」と言います。大空は、これは諸行無常ということを離れたものです。そしてまた「有為」のものと「無為」のものとに大きく二つに分かれます。為したものと、何にも為さないもの、人為的なものと、そうでないものということで、「有為」「無為」と言います。そういうふうに二つに分けます。さらにそういうものを子細に見ていくというと、我々の心でとらえられるものということで、意識でとらえられるものと、意識でとらえられないもの、という分類をしていきます。そして、その心とはどういうものだろうかということで、心をまた考えていきます。そんなふうにいろんな分類を通して、この世にあるすべてを説明し、そして、そのすべてが「無我」であるということを明かそうとするわけです。

そういう学問が法相と言われます。この法相宗、これは、名前はご存知かと思いますけれども、『西遊記』で知られます玄奘三蔵［六〇二～六六四、経蔵・律蔵・論蔵の三蔵に精通した法師］、この方が法相宗ということを中国において立てられまして、これが日本に伝わってきまして、そして、日本においても法相を主に勉強しようではないかという集まりと、集まってきた人がつどう場所が法隆寺だったわけです。このように奈良の仏教は、早

くに中国から入ってきました仏教の考え方を専門に勉強する、ということで開かれたものですね。

それに対して、比叡山の方は、また全然違います。比叡山はご承知の通り、伝教大師最澄［七六七～八二二］が開かれました。この最澄という人が、この比叡山において大乗の仏教を開き、その大乗の仏教［mahāyāna の訳。小乗は hīnayāna という。小乗は自己の解脱だけを目的とする声聞・縁覚の道、大乗は涅槃に積極的な意義を認めて、自利利他の両面を満たす菩薩の道］を勉強する人たちが国の宝となって、仏教を明らかにしていく、仏教を人々に伝える、そういう役目を持った場所でありたいということで、延暦寺というものを開きます。

で、その比叡山は何をもとにしているかというと、『法華経』という経典がもとになってできあがっているわけですね。その比叡山が伝えてきた仏教も現にありましたし、また、奈良に伝わっていた仏教も現にあって、その中で文部大臣の役目をしている九条兼実は、その人たちとも付き合いがあるわけですね。で、その付き合いの中で九条兼実は法然上人について出家したわけです。法然上人のことを一番信用したわけですね。その法然上人が伝えたのは、何を伝えたかというと、「ただ念仏です」というのが法然上人の伝えたものです。いろんなことを言ったわけではないのです。法然上人が言ったのは「ただ念仏であります」というのが法然上人の答えです。

これは、法然上人という人にはいろんなエピソードが残っていますけれども、一つ二つ紹介しますと、日本特有のこととして「穢れ」という問題があるということは、皆さんもお聞きですね。死の穢れ、血の穢れ、そして火、火事ですね。火も穢れなのですね。異常なものを感じさせるものが、みな穢れとして表されるわけですね。死も異常な世界を感じさせるわけですね。血は、これは誕生にまつわって、やはり普通の意識を超えた出来事ですから、異常な力を感じます。

そして異常なもののもう一つは火です。火というのは、現代人はあまりそれとは意識してはいませんけれども、何か言う時に「火をつけてやるぞ」とか、「燃やしてやるぞ」とかですね、あれはそれとは意識してはいないのですけれども、火というものが異常なものであり、そして穢れをもたらすものであって、そういう火をつけてやると言うのですから、非常に強い言葉になるわけですね。ですから火を見て異常に興奮するという場合もありますね。そんなことから、火は穢れの代表的なものの一つであるわけです。こういう「穢れ」ということが非常に盛んに言われたのが、法然上人とか親鸞聖人の時代ですね。中世の時

代です。

で、その法然上人にこういう話が残っているのです。出産してまだ間近の女性が、法然上人に「出産したばかりなのですが、お経とかそういうものを手にしてもよろしいでしょうか」と尋ねるわけですね。「まだ血が治まってないのですけれども、神仏にお参りに行っても構わないでしょうか」というようなことを法然上人に尋ねる人が出てくるわけですね。そういう人を前にして法然上人は、実に簡単なんです。「構いません」「さしつかえありません」という答えを出すわけですね。その時に「他の人たち、他の教えではどうか知らないけれども、この念仏の教えにおいてはさしつかえありません。構いません」というふうに答えられた。穢れとかいろんなことが盛んに言われる中にあって、「そんな場合、どうしたらいいのですか」ということに対しての法然上人のお答えは、「念仏できればよろしいです」これが法然上人の出された答えです。あるいは、「この世をどんなふうに生きていったらいいのでしょうか」と尋ねる人に対しても法然上人は、「念仏できるように生活しなさい」とおっしゃったわけです。

これも、エピソードとして残っているのですが、家庭の事情からやむを得ず苦界に身を投じた女性の話ですね。性ということを売るような形で生きていた女性が、法然上人に

「こういう者は、もう地獄にいくより他はないのではないでしょうか」と尋ねるわけです。なぜこういうことが出てくるのかと申しますと、仏教の戒律の中で男性・女性にとって抜き差しならない戒律ということになりますと、「女犯（にょぼん）の戒」というのがあります。異性と触れ合う戒は、教団においては一番重い戒であって、もしそれが現実に起こった場合は、即、教団から追放されるわけですね。ですから、性に関しての戒律というのは男性・女性共に非常に細かく規定されています。そういう点では、この異性と関係しての戒律ですね、これを破るのを、女を犯すと書いて「女犯の戒」とこう言われます。これは、男性ばかりではありません。異性との関係です。そういう性を売ることによって生活をしている女性ですね。ですから、生き方からすれば、女犯の戒を破る生き方をしているわけです。そんな戒を破る者は、決して清らかな生活をしているわけではないということで、その女性はやむを得ずそういう生活をせずには生きていけなかったに違いないのだけれども、それは戒を破る生き方をしているというわけで、その女性は「こういう者は、もうどうにもならないのでしょうか」と言って法然上人に尋ねたわけです。

これは、法然上人が土佐の方、高知の方へ流される途中で、法然上人を訪ねてきた一人の女性の話です。この女性に対して法然上人が出した答えはやっぱり同じです。「念仏申